

に集中している。蔬菜は概して作付種類が多い割には個々の種類別作付面積は小さく、また地元外生産物の影響を受けながらもその需要は伸びている。こうした農業による市域農村部は自然条件及び社会経済条件の相違により農業型態も地区によって特異性を示し、六つの農業地域区分が可能である。

第4章 農業の動向と課題

所で以上のような当市の農業も近年都市化の影響を受け、それは直接農家人口と農業労働力の減少、経営階層の下向化、兼業の進行、農地転用等にあらわれている。特に市街地周辺の農業地域においてはその傾向が著しい。従って今後の市農業のあり方として地域別の対策、都市近郊型農業の推進等が根本的にはからなければならない。

第5章 要 約

当地域は古来から交通・文化の通路であり、しかもまた北上川縦谷平野の沃野を擁する北上盆地を背景として防衛的にも領地（岩手県）のほぼ中央をしめるという地理的位置はそれだけでも発展的地域構成をもっており、南部20万石の城下町そして県庁所在地として中核をなす要因もここにあった。しかしながら工業その他の諸産業の欠如は、従来の消費的性格と相まってその後の都市の発展を飛躍的なものとはしなかった。また市制施行以降何度かにわたる合併は農村の性格を与えたが、近年の都市化により農業構造も変りつつあり、さらに都市そのものも生産管理中核都市、地方開発都市へと移行する方向に向っている。

西天龍地域の地理学的考察

江 橋 晴 子

調査地域は、伊那谷の最北部、辰野町から伊那市に至る長さ15Km、幅500m～7Kmの天龍川上流右岸の地域である。昭和23年土地利用図によれば、集落、耕地等の南北方向の帯状配列が顕著であるので、本論文では農業地域区分を行ない、同時に土地利用景観上の帯状配列を規定する要因が何であるかを究明することにより、地域性をとらえることを試みた。

論文の構成は次の如くである。

第一章 伊那盆地の概観 第二章 西天龍地域の地形 第三章 気 候

第四章 農業集落及び農地開発の歴史 第五章 現在の農業地域

第六章 むすび

当地域は、木曾山脈から流下する諸支流が断層崖下に形成した広大な合流扇状地と、天竜川に沿う河岸段丘及び氾濫原から構成されている。河床からの比高、面の連続性、ロームの有無及び層序などにより5つの段丘面に分類したが、これらの面は、伊那断層帯の走る山麓線或いは天竜川に平行に帯状に分布しており、扇状地を形成した諸支流により深く開析されている。また、逆傾斜面或いは段丘崖とは考え難い崖等の地形的異状によって示される新しい構造地形も本地域の特徴である。

農地開発の歴史の中で、その大規模なものは、近世初期の新田開発、昭和初期の西天竜用水路による開発、戦後の開拓の3つである。

中世以前には、山麓の裾合谷と地域東縁の低位段丘上及び天竜川沖積地地帯が、新田開発では、段丘中央部の支流沿岸地帯が畑地として、西天竜用水路では、東縁の高位段丘地帯が水田として、戦後の開拓では段丘中央部の地帯が畑地として開発された。

次に、当地域の現在の農業は、上記の地形、開発の歴史および最近10年間の商品生産の発展を考慮に入れて、字別統計を資料による時、南北にのびる西部山麓養蚕（雑穀）地帯、段丘中央部果樹地帯、段丘中央部酪農地帯、段丘東縁部稲作地帯と、東西に長い純畑作地帯に区分される。

中世・近世初期・明治末期・昭和初期・戦後。現在と時代を追って各時期における農業地域を描き並べてみると、当地域は、常に南北方向および東西方向にのびる数条の農業地帯から構成されてきたことがわかる。即ち、昭和23年土地利用図にみられた帯状の配列は、当時だけでなく、中世より今日に至るまでの土地利用を含めた農業地域配列の特徴だったわけである。そして、この帯状構造は、様々の自然地理的・人文地理条件により形成されたものであるが、その最大の要因は、気候・開発の歴史（合流扇状地をつくり、その後開析している諸支流は、短小であり流量も豊富でない。即ち地下水面が低く地表流水に恵まれないことにより集落の立地する場所は限られ、段丘上の耕地化は周辺地域に比べ遅れた）、交通をも規定した山麓の合流扇状地形であったと思われる。

